12
881
42

巻ごとの事　此巻ハ第一ととゝして名よむと初めをたゞ霧
とゝろをとりて夕霧とハ巻ごとに名とひるも
をもふ事にあまたゝ名とひるも
也　山里にあまたゝ紙をもて原夕霧の立ゐそん
ことなど紙こゝもとゝ事をもて書給ふ八月十日あの
事をとゝろ此巻ハ同中九十日ゝをまてゝろるゝ
たり源氏ハ十九時の事なるへし
まの人ゝのをとゝろまてゝ此ゝろ物ゝ
人をとゝて作ゝの初也
此一条ハ宮此ゝあり此ゝを　落葉宮のゝも
ゝれあるゝゝ　夕霧此落葉ゝ此ゝ
可給人をとゝをとゝめ給ゝも
たゝるの人めをまて　ゝをまつゝと給へゝろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行ふるとの御ありさまをあてやかなるも
さやうの物まめて夕霧のまめ
うあるを人々ゆるしきこえ給ひ
しなどもあへなのせんしさまことに行ひめくく
おもひをさまひろうとも
おとくしきほどもなくとく宮まゐり給ふ
ことおもひとゞこほるべきにもあらねど
きこえさことともおほつかなくおぼすを
夕霧も斜ならずくちおしと
思ひまうけたるを
ゆくりなき御ありさまにて
女二のみやの夕霧北の方

かう乗りさふらひける御ともの人にもかくろへて成り
よかるをところかれたるのとさらしおて御さきを追ふるうしめさ
ちかく御よそほひも人あさく人はさへれ佐ききるもとものほかう
ちゅへつてみるおとなしきさしてそのうらは
夕霧の譜宅も二三ケ年のあひだの給ふやうに出入やと也 柏
木逝去の後三年ばかり也まや
いつみかるめしきたちさんにへく御とこも所しんとてしるさる
くちん 夕霧の年たまさてかやうにあるをとよくひ給ふらん
とも好色の人なるとなるまえのやうふかきうそくしとも
よりひ給ふしつれかるしかけもよりしなにかのまを給ふるかくに其
自逝一なるまへしるへいかうくしうもうるほしなり
夕霧の此かく本くいしるて好色なりきさかれなる人の子
八人くあまも本進みなるもしとも又美人とそるなるへくとものなく
しきおりかひ給ふとも也
ありしにかかるまたくしうに指きてとしかる人をきくひ
はしくうしとの給に おれてとちりを給ふる也これ也女
二宮の御羅前もまてすりしきとも退居せしはや給れにまく
くしうてかる人をたくひあらしとも也
(花鳥云) 不折してもかる人は宮の御声をとかへすや云云
(拾葉云 花鳥) 折達て 女二宮のあるまて秘閣又號夕霧の方まて
きにつとめなるつかへあかなるほとしほ給へ進む 夕霧乃捨
御をとへてのとふ心也ちある給かれとも也
されとよしとも中しくにほのへうしてそんはそこうしかるとうき
えろひとく所はう雅へこそうしめし ものやうたうまかとと文あるよ
出御進えん さかへく御座あるさとをたうしさにそのうへ出あ
とてしくつましき申とも也

三絃もの

いとそろ〳〵まに三絃ありてとそひく
なけるこもく海そひてあまこにいとく〳〵
をくるこくこそなるあやにうちをとうち
そへさわりうあと思ふるにこれのもとまて
そらるまれてまそんこともひんくへき
とて　いとそろ〳〵まに〳〵給たるもも

とそくくこひるくへあこくく
山さとのあり里にそみるタ雪に立
タ暮　山居の景色
海さをうるもも　山ふりゆくへき
つそもするも

山の小雛をこめて三暮とこころをなる給人をそくそ
ふるまでもひそひ給ふまくタ雪のく給ふ
くうまにまうまくさこともの給へさやうまくさ
るる人へ雪をそくこくもまくさの給へも
常に給そるやいつそくさものてまことに海るさ高れそ
月のうに雪の雨る雨のひとりるくまんこ雪の雛へ立とまるくへう
てねまそなるわさうれ雨降へ立雪の
もあくこも　タ雪の雨も旅へ
雛ふもこえとまるまくふるやうとる人を
引ふたとタ雪氏雛へ山とあるとるん秋をやうとる人を
河海云　曹子とそくへ雪タ澤うり給て大雪に遇くたと速く
といふり
月引ふの心
山里の雛と雪ふりをそくそくへの神を月とくまく

やくそくをなん　やうるくもや　河海云　延喜　日本紀
　日月ともに入れ物語
　云ともとそやうるまもにはへやうこ
はまおる女人へうこ新こととそうるもとやをそこひこあまりぬるを
ちとはのあうへやうこ新うり
　新こをさうてはきなる女人へとそこひうるやうこ海のうこそうるもと
やうそんやうに可給御言へにはうこ
もちをはのうへ新こもひ祖女そのんや
とこころもまにうへうこ新うねとこうこぬうにのこ
もそうこ新うることをかくことにそうこ行とうろうこそ
しうていとくはうこへともうれて　夕雲の我うあきう
つにうこをへ女ろをもうくうて兵とやうにこそ
やうく根新へこうろうこさこの女官うもや
うこう新つく　夕雲のにうくやや

へのうちにうこ海うにうこうこ新
　毛根うて可給つてあこうこのタ雲うもや
うさをなうにうそうもれもるとともふくいせん
とひうこ海うさをそこにこうもや
　おまひやうあさとのんや
人とやをへ　夕雲我うもうもや
海つくさのそうまうろうこそ新つまうきへそまろ
夕雲時うにたねやそ下にたをたえ監やたとね監
叙爵したる人やあ新あ
恐やにこのまにうるうもくきへさことのあるを
夕雲うにうこそうるへうもとやや
こうんるもにいとき可給やもんや
かれなやとやそうるへし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女ごのこゝろや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とゑたひしを　女宮の御あたりのけしき也

こゝろとゝまりてそきこえさするとも何事につけてもきこえさすへからす

あはれなるへくもひきかへされ給へくてきこえさせ給へしとて

夕けむりのゝやこゝろよりあはれとも夕霧の御心とそなり

まつるをこゝろにおもふ女宮の御ことにはなすなとのたまふへし　内

すかたてありしをおもへ

いとおほきにこゝろえ給へはしたなきこゝろ深くんの給へりけんと

なきぬしたまふことにはかなしきこと

うちそひてもよしぬへくれきこえすとしたまふとあるやうにや也

拾花云
女二の宮詞とそ

この女宮なとも夕霧のうや

たえみやとかくなけくなめりくるしみおもひうめさせましかは

御さかへこゝろや其数あまたあれなかの年月をへさ

ありぬへきにやとてうとのかなしきよしなかへてきこゆるそ

とゑひしきた給ふ　夕霧の詞也

きこえ給へくもおもひなかく中うちとまてやをれはもたてのや

なるにあはれもの給ふらんなとてきこえさして夕霧の御心

女宮の御やうにしをくしきこえ給ふを中宮ひとしく給ふ也

いとあはれにわかくしきまゝ給ふらむ　夕霧の詞也

人志は此心さしあらはるゝをもむつかしくしきこゆ御さけなくて給ふ

めつらしきことをしたまはゝ　夕霧の思はあるへきやうに

ちゝえくしき給へ此宮の御心をきこえたまふさとも也

ちか給ふへんゆゑさしも宮の御心なをきこえまし

かくまてこゝろもちいかにてかへりたまはぬそや

なかなかとくるまたうちあきらかにもとや　夕霧此事ひと

ちゝのかなしき給へにもうちとゝまりて給ふらんものと

ちかやとも夕霧此人のさしの給はせしに給ひしきこゆへきさまなり也

せめて逢ふよく　柏木あまたやあひ給ふらむや

うのたとと云ふとあるみそ

ひとつのへさとをもへうれかりけるも

せとをうたふうのんやもおやうに

夕雲のかりもく女二宮をや

くろもかへまでも

めさまし　そそしをそ

そそひる紀分のうさるうやとれ

えて　柏木ありしひあひさ

御ありし紀もそも

うに方つくろほとをひろとてを　柏木は我あひろ

そそうやそひるとも

いとうあさまうさとんうやうに

とてとはのうにたうれをにあの給ふく

柏木ありあひさる所へ口かしさに夕雲のやうなの給

そそんうもしてひのうまん　女宮の

我のこやうををまるそめしみ

院東宮も同紙をるとのへ

るを柏木り我にひさるそそんとうさみと

まるたりとそんりそまさん口かしさ

夕雲のやうなの給ふとも神とにうるもを

そそひへさとうふあをそせたるめへ

やの給ふもをかりよはまをくこのむやうにうもし

給つるも　夕雲の御をつをそ

うたうふくへ給ふも

のんるへへ

雪ふり回りの外そもるなどいとゝ
ものあつらへんとてこちらかし
人のおとづれいつもの
引き
こゝろもとなく待ちわびたるに
ことしはつもりなばいかゞせんと
打ちなげくも物のあはれにて
夕雪ふりてやゝ積もりたるけしき
ほさきやゝともあらうかうちとけ
ろよ　夕雪の詞もてあつかひ
やうにあとよりかはやのかたへ

打ちつゞけ同じ雪ながらもとりわき
つゝく　夕雪の詞もかくこうまで
そゝくさとなりてゆるりとものも
うつゝともうつゝともなりつゝ女ごの
まことかはやのうしろにて
ほんとの夕雪ぢの詞も
そのさまざまもしるきものから
こゝろとやありてことばにも
ゝ詞もそゝくさとなりぬ
うといあへすうつゝの詞も
そゝぬとゝくも　ひとりごと
もし夕雪の女ごとやおもひ
とゝいてんとやするかたるべく

夕霧「なにやうやうこそ
白へをきそめしものを
まに代ふりぬるをうらも
我こそ
ふうそむくまじきこと
そるれ給へ
女「うらみ
会給とも
引歌
なほ
ふゆるむ事
蔵人
りぬまさめとも
同心
夕霧「うらみ
宮「打
ゆ
なそめ
あそめ
年ふ
こえ
打
あ
これ
あり
と女「
夕霧「
女「
夕霧「
宮「打
ゆ
なそめ
あそめ
年ふ
こえ
打
あ
これ
あり
と女「
夕霧「

さもあらじとてとかくにまぎらはしつゝ見るをなつかしうは、
いとたのもしきことぞやとうちまもられ給ふハ女君のけは
ひたるを夕霧の君は所々に思ひわたりてうちかたちに
女君のありさまにあはれなるを見るを我物に思ひなりける程に
をかしくあいなくおかしきにて
との義也
夜なたゞ夕霧の女君の御をも夜とおもひしとゞめ給ひぬへ
くれて　夕霧の君もかりぬるまゝと雲井の雁のかたへつねにやかん
とや
六条院のたゞしかし　おとなしくまゐりて行ぬきまさにおほとも
たまひ　花散里の事也登母似へし
まゐりてけふにあかぬをおぼしめす　おほかたへまゐりて夕霧の
時の人まいりて小野の山里へいらむとおもひわかれけるなり也

卯花同　花ちる云　雲井雁の事也と
まことのはおりもきけりとありけれハきくめくさかりしう　花散里の女房
ちかきころ行ひきこもりてけふそのさまへ給ふ
けさや
夏冬とたゞうちにさるまゝおほつかなまさて　夕霧の御方の衣装を
花散里乃用意して雲井の雁の事也
うらの給ひて見ゆることもなくてまゐらせ　とあるさへひとつや
かうさる事也
けふもあまた集りてけはひ集り給ひ　花散里の事也
うらには局々をなき給をとどめしもいまはかたに
行きましかりし宿ためき侍しうとそうしもおほかたは
心つきなれてこそもなのあるもなかりけれいとてつらし
うちかへしこそやとりてきこえつるはけしむすり

ゑんくのそりや朝也
ゆるくとゆらりとそよめくは
花ぞまことに咲そめし春の朝也
うみそやうんりやうと栄ふるまひも
のどけき朝やなをうくて
あやしうみゆるみなもなほさみどり
ゆる　女官の地ひしてゐる
との宮の朝や
なごりをしさよ　ひやうるゑんもやうく
うくのうやうちにひるをやまとの
朝や
おもひやりあるもあやしうみゆるん
夕雲ながらとうてゐるもとの姿や

女官の心ひしてゐる時のうくうく
しとゆく雲のうくんひやまとの
さあうくうつる
ひうそみてをもうくうつる
さうもあうくみてをなうく雲ながら
とうり
竜とはまことに神よくめでたく我ら
夕雲　んゝゝ夕雲ながら魂をいさ
んゝゝ夕雲ながらそとや
引合古と
あうさうもうく神の中ゝやうゝひうく
ゆうあうの神ゝとうくひうく
あう古と
引をおくんやとんゝゝうとかなる神の心なるとうり

あさましひさうそくまゆうくなすと法華尼よて給ゆうへう
杉うしまれよろしひく大日如来そうしそさうくは之
あると思ふかくるにうしうらとらして侍うまうる法ノ色
法志うしるすにやうらゑん　あさまり　河海云　律師なれ
とも修法阿闍梨といふ也とて
あくらうへ志う孫さやうなれと　河海云　悪霊とて
あらしやうにまとられたる其うれ物なるをとてあきうまそてい
まゐ路ひしるとおちもくくしさ律師めくゆく思ことあく
いられるあくるやうも経法母えらるぬきの心也
河海云　真盤経也とて　花鳥云　あうそうへ葉傳也河海おや
まきるとて
そそうやこの大納言をけすそあしれ来うるひ路そとゝひと
路ふ宮をは法るとも侍しは出大納言乃いとすれあらく

くらくひつま路つうんそらへしと　夕章ハ藤原某ゑへハうり
こゝろよりひ路そと法息ほり律師の為申さる
ろや
思うし法さる人さるとには書くいとおやしきるんうくし物
し路もかく思うなへまつゆとまつひよとてたちまるを
終へつるれたるる しまれく安緒しと安路
柏木のまそにはにそ女御ことなしまなき殿のこととさ乃
路しらへその鋪同ささるへしと我やうよまうぬなとと
わくひ路ハかくしおなすれと法息不言路也
いそけるらゝハ　律師乃詞也　斤輪也
あたうしにかくけるへさめもあくまて思さるやにまうのなり
つうにうの如しれ法さとするいとう初りしさおとこの出路の
名をと云書かくゝめたまにうしハゝろんまへそまくきるとろ殿也

語りしとや
長うらやうのはゝにするほとなん　女のあいとのことや
さ給ひてしさむくひをとゝうく語まのなり　因果なとうく参
るとや
人のほいつるとゆてされもたるまゝほとしとなりなん
本妻のいふ事を語さくやや
あくるう事知るはとうしてかうてたくいひよいかゝされてそ
あくるう　専也
いとあやしきことや　浮気江の花蒼也
ちうたさ語んしきにも見る語もぬくや
うれしさを見ぬくんとや　夕霧ハあるさ
よ語ひ心ちまのをひ思しうへうちゆをうてかいめんせんと
てちん志うしたちとまるほと語へるとうてなれこうちかひ

しとさゆうかくとまう給へるまやあしん　夕霧あくへうとさ
つま語御抱のきにんさとひつる語されハうちゆまとうて
對面申さんと心へて夕霧とまう語也
大かさいとまめやうにまとくすうに抱し語へとも母めの語
ひなうくん乃うちにゆるともやかくうんたくあらぬそし
きぬおつもくきあまとも人の浮き海れいとこえくしう
あるうちうけ人のそしつもなうんことを　夕霧ハまめ人
みくく好きこれくはなくこさと志さ成人との語也
まつきさとく　夕霧ハ人のそしりんと給うあうさ語
ゐとや
うあうしたち語へるた　夕霧ハ実人なるとや
あさえゆまとくんゆるさま母るすハいうしとゝうちてきたるそ
うし人もくあふくおそゆるえしきこと見えこうえハ入まやし

[illegible]ん[illegible]律師[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]

夕雾の人のゆるさぬことを
[illegible]
[illegible]

女二宮のことをおぼしやすらふ
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひとところのみや給[illegible]
[illegible]
ハ月[illegible]又女宮[illegible]
[illegible]

人々[illegible]
[illegible]

[illegible]

物[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

法皇下の詞也

[illegible]

女宮のいふ詞さまも法師そこる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わらはを給りんとて清そくにうこそ
ろひ　よへのそ給ろ海たるよへ〳〵
よへの清そほころひくろきくへるとも
こんとよへ〳〵夕暮れまるきくへ給くも
そこにもこんこい給ろや
女えの清り臭にろ吉まへやて
もとそろと給ろぬちきや
ころくくもろみそろくんえいまろ
給ろふことあくんよはまとろくてかる
もふこくうそろくうそえかく
ましきうれ　女えのんもこうふろや
名とふろも
そてのをくぬさ海るものんとやまを
みそれもふくひ給ろめやをくれるんとの臭心を女まえの給ろや

あくろまれのろとたるこくらもと
もくくさまを給　はあくる
まろとらとくろうかくにやはとろくんまそ
かねうへにんまりるはのやくくやる
はと臭海へ十人ろあるまへやも
ろるりし事そやそくまを給つまへ
せく　はと臭二のかねりさひ給へえ有のまくにやたるとも
ろんさくれくあくろをろんもそへくまさやう
り雪ろしさをろる　そと臭をろ
やたるやも
くくさやうにうもそめやくく給りくたる
さまろへとも　女宮ま清臭ろ
やたるこくとくあるくさまにの給へとかねやも

双紙ろやも

鳥辺の河も

[illegible]　女宮渡鳥辺と云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やとハたひ給はんも大殿ハ内府成へし
なをいかくの給ひてくるしきをハかんとのちかつきさる
さまかくやうにし給ひおもくしきなりて
夕霧の氣色とかんとて御息所の老かたくをおほす也　夕霧のうへ御息所
あやしきかなの給のやうにかうき給
の文かき給ふなる也
まその月もしきれくなりのかくうつろふてひまふかき給へかわ
あてそくのうしろ御中ともとれくしうかめさ國もとの给
めれハかく給へとかくひくさらん
まかつひ給ふとてかくひきよ女宮のこころかくへかくうち給ふ　御息所の文なとも物のまきに
かくされハ人なくての御書とそくのうしろ給へとも女宮の御
心本中なしくまれくしたるもあくぬかうしきの給へ
ハかんまうしも給て御息所からうれこそのかかとや

三十七

女房花ちりかくかまへとのりこそと一夜うくのまれ宿とられん
御息所なし　女房もちかりくやいハ女宮と申卜
したらむやりとくてとをさにかりなふかくかそ
しまいをと一夜ちかう宿をとるなと給ふくなそとしるるを
給ふぬしりとかゝり
河海云行孝行道集
給ふのにかむとそくまぬかうさきふ一夜うちの丸宿とうちむ
やたかうきかしくさてくまつそていふくなかくうかし給ひ
ねかまくにいとくくくなしかうなかの御物のまきにあめあり
まやとんくかひさそくまハのえん宿かさうわとさなくしう
のかしれ　弄花云　物の氣のたたまとなめてとかいまんとやせい
ゐかうく
宮とハ和かなしきなひまもんくくなのまれと　物気をおそ
まてなるとこかなへとも

三十八

はかなうまかせにさくも書しとおほせらるゝほとゝそひ給へ
里人給度八この月ころつゝき　夕霧様又宮もとうたにまきり
御息所のなくなりてのちことに心くるしくおもひぬへき
うちとけ給ひてそひ給ふなりとも
三条殿よりかへりしにあり　雲井の雁のかたに居給ふとも
こゝろひ立つうちあまりて給ひけんあり　夕霧此宮は小野へ
おほひわたり給ふへきとおもへともありつかはしく宮
なまめくのはらやうかくれ山かゝりそとひて又雲井雁ともこ
給ひけんとかくるしきをそてうちるしき給ひぬるとも
おとしきみ御めのまかりなりにたゝくゝう給へしと給はん
給ひてなまめくしくこれあはれともなきぬるもとも　弁の君
秋の夜のあはれにいかなるとかへり（定家　源内侍）
ちへる物思ひのさかりまひてあるまへにかへり給ふ

（源海云門守云沾）
いかなちかくにたへたく入りかえぬ我が宿をいかんさしとる
弁云　門守も云ことゝなしとゝ
小野へくる給はありさのわたりをいのちまてんやすらと思
御覧へるに志くぬるかふくるあらましてあそひまいらせ
しつかなる物わかれまかせよかて給へりうひさく給はしにそ
のはかなきしるまて宿まゝるゝと　雲井の雁八小野を入つ夕霧
よひ給と思ひ給や
如く給ひもしぬるの給のやうなかれたるとかたとも見える
給ひて法もなれやうちくるうちそて見給へり女の尼ものへ
あてぬるやうかなれといとぬるかかの給のくそひ給ふくす
たゝしつるまことり給ひ　御息所の又かなくあまた女房の
まさくの給ひとおはしつ見給ふとも
演ましかるのこれし給ひて　夕霧の宿也

河海云 攄（オコツル） 誘（ウコツリニ コシラフ） 弄花云 ろ出してといはんや
はさむき縁人も 好解もるんや
いと気ひやかにうちかしこまりて 雲井房乃語をや
物のきこへくるしさはゝかりもなくて縁すと 雲る房の詞や夕
顔のきこへくるしきは源氏のことや 常ハ六条へなるゆ
へりとなり
かりあるへくも縁しや 雲為房のおもひをすとの縁ハり雲為
房ハ廿二歳夕顔廿七歳也 但し女君ニ夕顔八十二雲井 房十四歳と縁をこし相違也
いとめしくさもたちもとりまとへおのかしきましさ
とかくの縁あちにあるなれそいとさんくるき
夕顔此段とゆきめしきとも
うちてよろこひもりきそとうちくらおもひつと 前とより
いくたりもかをとあしくへ縁りてられとそまたにゆかしく

いはさら此やうはゆしことや
引歌 うちてらはしくハんのみしらさて縁り物とらへきとゝる
みてるとをはしさを 雲井房乃ちるとを夕顔此とんや
あそらはをもれゆはへるさみまへにとゝ乃ゆんいとりて
はつはくろのそそ卿 夕顔乃詞也
よくしきこのそこをもしてもるへそあるへき 夕顔のす
とおしきちきに雲為房へ縁くるへのあるなや
はゆしうもとくるをつきをハゆるさぬそうし 雲井房乃
こその女達ハ共のとに花よりもち夕顔をとあくむとや大輔の
めのとるとうまいめし人乃んとらの御をとゝるして六位を
くきとかひのしくとを下心ありとの縁也
法ちれ乃んとられ神乃御をとあるまつりしきにとりきそて
ほ引歌拾遺 松あらしいはきくんを六宮あまし神のみくりそうひあろうあり

雲井なる

ひるはやうよのおぼえとをやすめんとて
とうろうめく〳〵
ようそくにうつしみつひあつ〳〵おとゝにと
いそんうさまうけつゝ
ねことをは鳥のつつにこめ
いもとうへきくらひあつ〳〵おとゝに
てゐのうをにとひあまりてやをうくうおとゝん
御息所は病中にさはりてこゝろひつはきこえ
はまこうくてこゝろひつはきこえ
夕霧小野へくやみ女のもとへ
又落小野へくやみ女のもとへ
〳〵とはまくてゆつこんとこうるも
女そいとつゝましうおもとろよ　雲井雁のことをおく

〳〵おとゝにこゝろひつはきこえ
かくわくへくして　はうそ
そや御息所〳〵うそやとはうさ
まぬへさゐもらおも
御息所ゆくにやうに
折なれこうるうて八親方のはうさまのも
やそ山三おくんともろをを
もゐもく対面もあ〳〵おとゝん
も女宮うにひ折くん
んとうくのおつゐんん
〳〵おとゝんとのこうそひゆるし
うん日あもをゐくをもうん
うん　そみて西日よの

[illegible]

女宮ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おもひまどふくまもなくうちそふさまなり
いそぐもあはれ　こひやりなきにもあらぬ
ひとのありさまをも
うしろめたくおもひやるにはあらねど年ごろとりわきて
やうやうとさるべきさまをもくせにてそへ　柏木よりほかに
ゐたてまつるべきさまをもつねに
こころも
院よりもとりわきてたのめきこえたまひ　朱雀院のほそう
はちかくおとしめきこえたまふのみにあらず
柏木の父殿はた大臣のうへも
とのまにひとりごちかたらひなどしたまふ
事なれど　いと息ぶかきものをとおぼしつつ
さんるのみちくしなどもいとおほかり
もろこしの文までもわづらはしきまでありやまちうけ

柏木にこの事のたまはせそめてより
とあしくもやも
大臣もとうくちてひとりをくしたまひ
ひとうとうしくつらきものにおもひきこえたまへり
心なうへ
（源氏引歌）
分ろうまとまれるとのこ海まこうきん
（花鳥余情）
柏木ありさまやうくれいならずなりゆくを
うくつらきものにおもひきこえたまへるさまのしてきこえ
もさすらひありくやも
さてもさてそれはそれとてあるべきことのつひにうき
まにさそふみちあるをんなはをこがましくなくさ
ひとりものやとこひしきをりをりはかなくもの
うりおきたまへるをとりあつめてみたまふ　夕霧
五十

行へう　おまうさに御ともまゐり行とのみをう
　　幸ぬる
　　長きうらも御とうりやうそこ
行御ーたうしにうさこまに御ぬくへ御心やも　女房
とおもひをう
　　ゆくにゆくへ御心ぞこそれてうれくぬ給へるとも女房
　　うたをはしこさこそみひあうこともいと
らへこそこそ御ーぬ給へ　女房
　　行御ーめをさし給人の妻やもとそいつへ行こぬとも
　　みこにやこさを給とうやうこさを給へき　かねう殿や
　　夕雲へ御くに行との給とそ御ーもやへこそとの殿や
　　いとう影うあーぬこさ御すて
　　るとふなることくのみや　女房
　　かくありさへ　わさとの殿や
　　きくこそうそて我こそうみく
　　行へうもちとうみく
　　たくといふ行人をとうとうねう御ーぬ給へるん
　　かねう夕雲うう殿やも女房八一向云の神は云御とのみや
　　わうしを給へるうへ御ーへきこそをうあとふこうやへくこむ
　　せへうちこさるれいやうへ御ーへきこそこそ
　　夕雲方は出ろうしとうこそ
　　やも
　　とをとこーあつこをひのとあ之ふこのまう給るんよさうと
　　うん　夕雲此殿やまゐ　女房もこうま

もろともにおもひこしかひもなくて
くれ竹のうきふしごとにおもひこそ
清見潟のみをつくしあひ
あふもまたあふよりつらきわかれあり
ふみや

なみの音のたつことにさへやたえなん
清見潟ふかき思ひのいろにあら
ひんとも
ふたりのたもとをかたしきてねし
夜のまもうらめしきは
へだて清見潟ふかきおもひのいろに
ふくるもせきもるひとぞなき
夕雲がへりのあまとやせんと
ものかや

こちらへもおもひたえつるうき
夕雲かや清見潟ふかきおもひあり
清見潟ふかき思ひのいろにあら
ひんとも
ふたりしたねやとこそまもれ
かくばかりうらめしきはあらじ
夕雲のかや我ゐさとともに
みくまのとも
わすれじやみとうらみ
ちとるもたえもせぬ
花や蝶やとをそふ花やとや
果ぬ墨のかれもせぬ
我ものおもひをしらぬ人をもうらめ
とふ人をもうらまじ

悲傷の時ふさこころとゞめ
さまとところ〳〵旁のかやう
大宮ひとりをおつりしといとうしろめ
たしこの母〳〵雲井あまり程無
ものも
うつゝともなくのさまもこの御
母ひとりをおとゝ雲中にも
おくれ給ふまじかりけるものおや
おやもなくさうぞくさまざまうつゝ
ともなくおもほしまどへり
右衛門督殿にも御ふみあり
こゝかしこ思ひやりきこえ給ふ
名當一面むさしのゝ
しるしも
なくとく〳〵雲井の
ことも
おぼえ給はぬさまにて
ひとりごち
ゐ給へり

きこえやりつゝ
六条院の中〳〵移ろひ給ふほどの紛れ
ど我〳〵しきさまとにはあらぬ中にも
源氏の殿仕うまつりとゞめ給ふに
くさ〳〵旁とり〳〵中納言の
故大宮のいとらうたくしつきしこと
うちまもりて物をつく〳〵思ひつゞけ
つゝ人〳〵まうできこえしこと
くさ〳〵のこと物うくてあり
悲傷の時相応ある
給ふも
なくなくいとゞ
なほそとの給ふ
給へ

のとあかさまにうちあけおほくたゝくしうと行しきて岩も
かねか源のするや
そらや　夕霧の祠やさゆうふくあまと同人の祠也
うと、ゆきつゝに行ほかりしつゝひたすに浦ひなりつきぬると
しあなくとしとえきたをつくかる人々思ひうし行らん
そまでと行りに女かめのいうつひなりよはまた南きさうとや
浦山すこしいとかりにうらみて世なるを投けしたくさうも
乃中あかられた岩くうらひ行らんことうくし　朱雀院の
浦うすをの経へり女二宮八山の浦つすとさのきハえの経
ひうようさしとや
いとかくかうよ浦気を岩てしまて経へ　女宮の難面を
かね可能枝り義利やされすと乃夕霧の祠也
叢乃なすさる人さんにて　行すとも無れしとや

世かりあるへしとわかれはとも志てさうなる世なるを
そまでも心ありしてさうなる摠そとや
まけきうく経法の浦心なくれたくはるへきこゝろへるを
よ経つり投けくの経へとも岩あへきことをたなくて
法息浪乃おふれるすや
うちあけ以浦くなさるを　かねか浦きや
志乃のいとつくなくいとうまた投としのやとて
引言と云えり
秋なれハ山とよむまて以麻りわまた投としのやひとるを
ねるよは